

令和4年度前橋市粕川歴史民俗資料館秋期企画展

ゆくたて
『赤井戸式土器の 経緯－赤城山南麓の後期弥生土器－』

開催にあたって

あかいで

赤井戸式土器とは、旧佐波郡赤堀村香林（伊勢崎市香林町）字赤井戸出土の一群の土器を以て、昭和24年頃に型式設定された弥生土器の一型式です。実は、この土器は前橋市東部の城南地区や粕川地区で数多、検出されており、赤城山南麓地域を代表する弥生時代後期から古墳時代にかけての土器でもあります。今回の企画は、この赤井戸式土器を取り上げます。

なお、今回の企画展開催にあたって、桐生市教育委員会文化財保護課、みどり市岩宿博物館、藤岡市教育委員会文化財保護課、富岡市教育委員会文化財保護課、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県立歴史博物館から資料の借用等で便宜を図っていただき、ここに記して感謝申し上げます。

前橋市粕川歴史民俗資料館

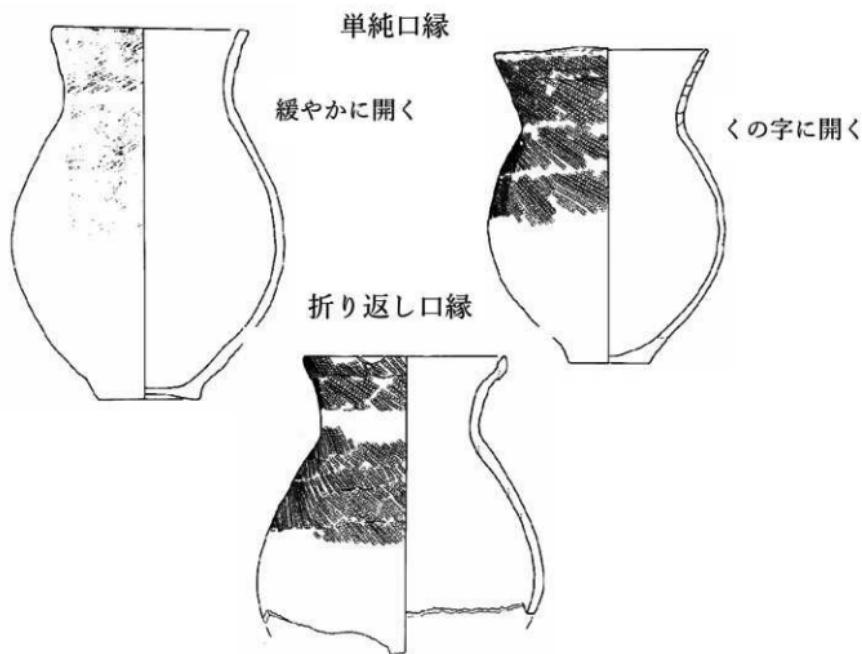
「赤井戸式土器の縁跡」展示資料一覧

No.	遺跡名	出土遺構	点数	所有者	遺跡所在地
1	周東隆一コレクション	赤井戸遺跡		桐生市教育委員会	伊勢崎市香林
2	周東隆一コレクション	熊ノ穴遺跡		桐生市教育委員会	前橋市西大室町
3	峯岸山遺跡	第2次調査4号土塹	2点	桐生市教育委員会	桐生市新里町武井
		第2次調査5号住居	1点	桐生市教育委員会	桐生市新里町武井
		第2次調査9号住居	2点	桐生市教育委員会	桐生市新里町武井
		第2次調査8号住居	1点	桐生市教育委員会	桐生市新里町武井
		第2次調査3号住居	1点	桐生市教育委員会	桐生市新里町武井
4	堤頭遺跡	6号住居	3点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町
		14号住居	8点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町
		16号住居	5点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町
5	山上城跡Ⅸ	H-1住居	16点	桐生市教育委員会	桐生市新里町山上
6	荒砥上ノ坊遺跡	2区60号住居	9点	群馬県	前橋市荒子町・二之宮町
		2区91号住居	8点	群馬県	前橋市荒子町・二之宮町
		6区14号住居	10点	群馬県	前橋市荒子町・二之宮町
7	神社裏遺跡	1号住居	1点	みどり市岩宿博物館	みどり市笠懸町西鹿田
		3号住居	13点	みどり市岩宿博物館	みどり市笠懸町西鹿田
		4号住居	3点	みどり市岩宿博物館	みどり市笠懸町西鹿田
8	成塚向山古墳群	4号住居	7点	群馬県	太田市成塚町他
		6号住居	8点	群馬県	太田市成塚町他
9	竹沼遺跡	EH-20号住居	15点	藤岡市教育委員会	藤岡市西平井・緑塩
10	阿曾岡・権現堂遺跡	65号住居	15点	富岡市教育委員会	富岡市宇田
		47号住居	16点	富岡市教育委員会	富岡市宇田
11	下綱引Ⅱ遺跡	II次 H-1号住居	14点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		II次 H-3号住居	9点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		II次 H-12号住居	2点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		II次 H-15号住居	6点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		III次 H-10号住居	3点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		III次 H-11号住居	5点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		IV次 H-35号住居	6点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		IV次 H-49号住居	9点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		IV次 H-82号住居	12点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		VI次 H-1号住居	8点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		VI次 H-20号住居	11点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		VI次 H-41号住居	5点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
12	西迎遺跡	VII次 H-4号住居	4点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
		VII次 H-11号住居	11点	前橋市教育委員会	前橋市西大室町
13	三反田遺跡	B7号住居	11点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町女瀬
14	西原遺跡	5号住居	14点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町女瀬
		4号住居	14点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町深津
		3号溝(環濠)	2点	前橋市教育委員会	前橋市粕川町深津

1. 赤井戸式土器とは

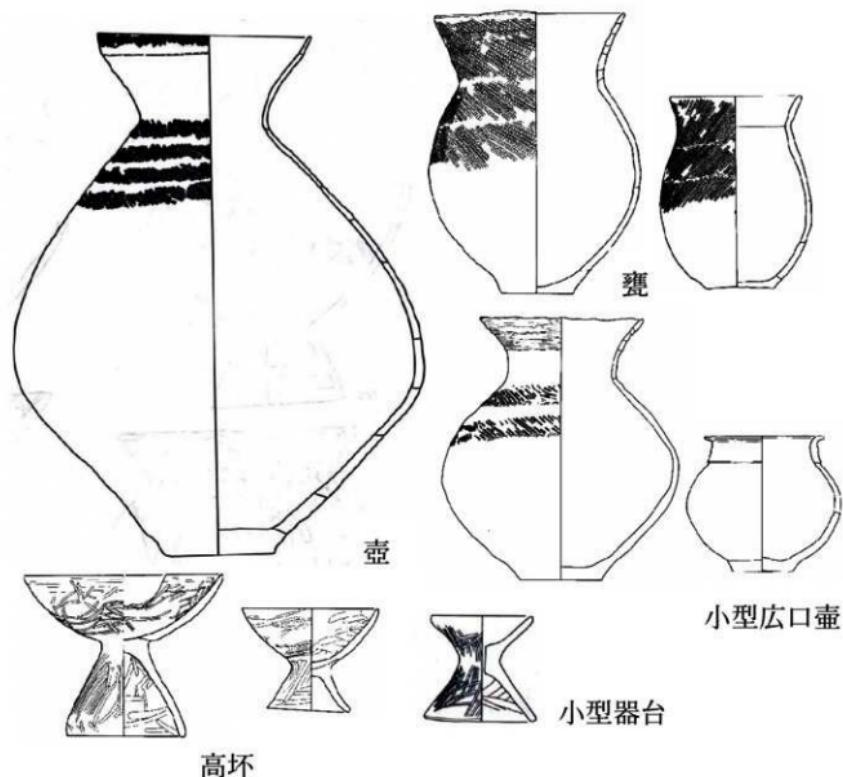
赤井戸式土器の特徴は、土器の口縁部から胴部の上半部に縄文（縄を転がした圧痕）が施文されていることです。

器形の特徴は、甕形土器で顕著です。胴部は緩やかに膨らみ、頸部から口縁部にかけて緩やかに開くものと頸部からくの字に折れて開くものとがあります。両者とも器の高さに対して、胴部の径が比較的小さいことです。口縁部の形には単口縁と折り返し口縁の2種類があり、単口縁には輪積み痕を明瞭に残したものがあります。



2. 赤井戸式土器のかたち

基本の形は甕形土器です。甕には大型品と小型品があります。その他に胴部中央が張り、やや上下に潰れた球形となる壺（大、小）、高坏（大、小）、
塊、片口、底部に单孔を施した 甕 形土器、小型器台などがあり、時期によりその組合せには変化があります。また、器形も最大径が胴部下位に下がり下膨れした形となります。



3. 赤井戸式土器研究史

（1）周東隆一さんの赤井戸式土器研究

佐波郡赤堀町香林（現伊勢崎市香林）の小字「赤井戸」から出土した土器を基に命名され、弥生時代後期の土器として位置づけされました。昭和24年（1949）頃のようです。命名者は桐生市在住で終戦後から昭和40年代に活躍した在野の考古学者周東隆一さん（1902～1995）でした。周東さんは、赤井戸出土の土器について、当時既に著名な先史考古学者であった山内清男博士の「一型式を設定するにたる特色がある」という指摘を元に「赤井戸式土器」研究に邁進することになります。周東さんは研究のフィールドを赤城山南麓地域に置き、日本考古学協会で3回にわたって、赤城山南麓の特色ある弥生土器としてこの赤井戸式土器を紹介しています。また、赤井戸式土器に後続する土器として「熊ノ穴式土器」を設定していきます。この「熊ノ穴式土器」については、前橋市西大室町熊ノ穴、同五料山出土の土器を元に設定しています。ケース内の資料は、周東さんが昭和42年（1967）に考古学ジャーナル5号の誌上に発表した赤井戸式土器と熊ノ穴式土器です。周東さんが収集された膨大な資料は、現在、桐生市教育委員会に移管され文化財保護課で整理、保管管理されています。

（2）菌田芳雄さんの赤井戸式土器研究

菌田芳雄さん（1912～1976）は、周東さんと同じ桐生市在住で、縄文時代晚期の遺跡として著名な桐生市の 千綱谷 遺跡の調査研究者として著名

です。菌田さんは縄文晩期から弥生時代の土器へと研究を進めました。赤井戸式土器については昭和41年（1966）に、「桐生市及びその周辺の弥生式文化」を上梓し、太田、桐生市地域の土器を中心として赤井戸式土器について言及しています。さらに昭和49年（1974）、勢多郡新里村武井（現桐生市新里町武井）の峯岸山^{みねぎしやま}遺跡で、赤井戸期の集落遺跡の調査を実施することになります。昭和50年（1975）には報告書が刊行され、赤井戸式土器の細分を新旧、I、IIの2分類案を提示しました。展示した土器が峯岸山遺跡の発掘調査で出土した資料の一部です。

（3）柏川、西大室地区の調査

昭和55年（1980）、勢多郡柏川村大字一日市（現前橋市柏川町一日市）の「堤頭^{つつみがしら}遺跡」で、赤井戸式期の良好な集落遺跡が検出され、同村大字深津（現前橋市柏川町深津）の「西原遺跡」では、赤井戸式期の環濠集落が確認されました。また、深津地区に隣接する前橋市西大室町「上繩引^{かみなわひき}遺跡」では、同期の方形周溝墓群などが検出されています。この時期以降、一段と資料の蓄積が進むこととなります。

昭和58年（1983）、これらの資料を基に、小島純一（1956～）はIII期4時期分類案を提示します。ここに展示した堤頭遺跡6号住・14号住居はII期の古と新に区分しています。III期はまさに、周東さんが提唱した熊ノ穴式土器の時期です。

4. 赤城山南麓地域の赤井戸式土器

やまがみじょう

(1) 山上 城 跡IX

山上城跡は桐生市新里町山上（旧勢多郡新里村山上字本町）に所在する中世後期の城跡で、新里村当時から8次にわたって調査が行われてきました。平成17年（2005）に発掘調査された9次目の調査区となります。調査箇所は、現在公園として整備されている三ノ郭の南端にあたり、東西に走る堀切の南側の一段の土地です。赤井戸期の堅穴住居2軒が検出されています。その内、良好な赤井戸式土器を出土したH-1号住居の出土資料を展示しています。良好な赤井戸II期古段階の甕が出土しています。II期新段階に該当する壺口縁部の破片も出土しています

います

かみ の ぼう

(2) 上ノ坊 遺跡

前橋市二之宮町から荒子町に東西に走る史跡「女堀」。その女堀の史跡地として指定されている女堀沼地区と二之宮地区の中間に遺跡は所在します。女堀の遺構を挟んで南北に遺跡地は広がっています。

遺跡は昭和57年（1982）に発掘調査され、平成7年（1995）に報告書がまとめられています。弥生時代から古墳時代前期の堅穴住居31軒が調査されています。

この遺跡では、在地の土器に混じって北陸地方の土器が多く確認されていることが特筆されます。

6区14号住居では赤井戸式土器の甕が7個体出土しています。胴部の最大径が下方にある赤井戸II期新段階に該当します。

2区60号住居、91号住居は赤井戸III期に該当し、北陸系の甕が顕著です。また、大型壺に口縁の折り返し部の幅が広く縄文が施紋されているものがあるのも特徴の一つです。

(3) 内堀遺跡群（下縄引II遺跡）

前橋市西大室町の大室公園整備事業に伴って発掘調査された遺跡です。昭和63年（1988）から平成11年（1999）まで12期にわたって発掘調査されました。

この遺跡は、かつて、周東隆一さんが五料山遺跡として、昭和42年（1967）の考古学ジャーナル5号に報告している遺跡と同一のようです。

この遺跡では207軒の竪穴住居跡が発掘調査され、内99軒が古墳時代前期の竪穴住居跡として報告されています。この古墳時代前期とされた住居の出土資料には赤井戸式土器が多く見て取れます。赤井戸式土器III期、熊ノ穴式土器の時期です。また、この遺跡では結構な割合で、櫛描文土器が共伴して出土しています。これは、近接する、粕川町深津の西原遺跡の出土資料とも共通する傾向です。

(4) 西迎遺跡

前橋市粕川町深津の西迎に所在する遺跡で、弥生時代中期後半の集落遺跡西迎B遺跡の北に位置します。昭和54年（1979）に竪穴住居1軒の調査で、赤

井戸III期の資料が出土しています。また、櫛描文を持つ小型の台付き甕が共伴しています。

(5) 三反田遺跡

前橋市粕川町女渕の三反田にある遺跡で、平成2年（1990）平成5年（1993）粕川村（当時）西部グランド公園の整備事業で発掘調査されました。BH-7号住居の出土資料は櫛描文を持つ樽式土器を主体として、S字状口縁台付き甕と赤井戸III期の熊ノ穴式土器が共伴しています。

(6) 西原遺跡

前橋市粕川町深津の西原に所在します。昭和54年に浅間C軽石（As-C）の第1次堆積層が底面に確認できる上巾3m程の堀が確認され、昭和60年の調査で、その堀が、集落のまわりを巡る環濠であることが明らかとなりました。その時、5軒の竪穴住居が調査されています。その後、数次にわたって調査されています。

環濠内の浅間C軽石を挟んで土器の様相が異なることを根拠として、赤井戸II期とIII期を分けています。展示した4号住居は環濠内側の竪穴住居で、赤井戸式土器、櫛描文土器が共伴し、III期の土器も出土しています。出土した土器の量では櫛描文土器の方が多いようです。

5. 群馬県東部地域（東毛）の赤井戸式土器

じんじゅうら

（1）神社裏遺跡

新田郡笠懸村西鹿田字向山（現みどり市笠懸町西鹿田）に所在します。

昭和 58 年（1983）赤井戸期の竪穴住居跡が 4 軒検出され、発掘調査されました。その内 3 号住居、4 号住居から赤井戸 II 期新から III 期の資料が出土しています。

3 号住出土の壺は、肩部に 2 段の帯状縄文が施文されています。赤井戸式土器の壺としては、胴部があまり張らず、甕に近いかたちです。また、4 号住出土の甕で、肩から口縁部にかけて粘土の紐を 7 段にわたって貼り付けたような意匠が特徴的です。堤頭遺跡 14 号住居出土の壺や、山上城 IX 遺跡出土の壺の口縁部と共に通する意匠です。

むけやま

（2）成塚向山古墳群

太田市成塚町に所在した遺跡で、現在は、北関東自動車道太田パーキングエリアとなっています。群馬県でも古い時期の 4 世紀の古墳である向山 1 号墳が確認され、発掘調査された事で著名となった遺跡です。この向山 1 号墳の墳丘下や隣接する北西斜面地で古墳時代前期（赤井戸 III 期）の竪穴住居跡が 21 軒検出調査されています。

その内、4 号住居と 6 号住居の資料を展示しています。

4号住居出土の広口の甕はこれまで類例がありません。6号住居出土の壺には口縁折り返し部の幅の広いものがあります。多くが赤井戸III期、熊ノ穴式土器の時期に該当します。

6. 群馬県西部（西毛）の赤井戸式土器

（1）竹沼遺跡

藤岡市西平井、緑塹に所在します。昭和52年度（1977年12月～1978年3月）に発掘調査されました。60軒程の住居が検出され、内「弥生時代後期終末から古墳時代前期住居跡4軒」検出されたとあります。

E H - 20号住居からは赤井戸III期の資料が出土しています。口縁部と肩部に縄文を施した壺は、大きく球形に張る胴部が特徴的です。また、口縁部に粘土帯の輪積み痕を残した甕は赤井戸III期の特徴を示しています。さらには、S字状口縁台付き甕が共伴して出土していることが特出されます。

（2）阿曾岡・権現堂遺跡

富岡市宇田字阿曾岡に所在する遺跡です。調査は平成5年から7年まで実施され、平成9年に報告書が刊行されています。弥生時代後期の竪穴住居跡58軒が発掘調査され、その内訳は、樽式土器のみ出土の住居40軒、樽式土器と赤井戸式土器が混在する住居9軒、赤井戸式土器のみの住居2

軒、樽式土器、赤井戸式土器に古式土師器を伴う住居7軒と報告されています。隣接する権現堂地区の弥生時代後期の住居と合わせると80軒を超す弥生時代後期の大きな集落遺跡となります。これらの住居跡出土資料の内、47号住居と65号住居出土の資料を展示しています。

47号住居出土資料では塗彩された壺に樽式土器の文様である簾状文と縄文が施文された壺、口縁部に輪積み痕を残し、頸部に簾状文、胴部に櫛描波状文を施した甕が出土しています。また、65号住居出土資料では、口縁部に粘土紐の3段の貼り付け、その下に縦長の貼付文が施された塗彩された壺が特筆されます。

7. 終わりに

赤井戸式土器は、赤城山南麓出土の資料を基に型式設定された土器であり、弥生時代後期に位置づけられてきました。しかし、近年では、赤井戸式土器の名称を使う県内の研究者は少数派のようです。埼玉県・神奈川の同時期の土器型式である「吉ヶ谷式」の名称を使う研究者もいます。また、その時間的な位置づけについても、新しく見る考え方方が主流のようです。

今回の企画展は、赤井戸式土器をもう一度、赤城山南麓の弥生時代後期の土器型式として見直してみようという意図で企画しました。しかし、残念ながら、その意図はいまだ道半ばという結果となりました。

これまで、赤井戸式土器については、いくつかの疑問が投げかけられてきました。

まず、赤井戸式土器は弥生時代後期の1型式たり得るのかという疑問があります。

赤井戸式土器を特徴付ける上半部に全面縄文を施文する甕の変化を追うことができます。赤井戸式土器に特徴的な甕、壺、高坏、甑形土器などの組み合せが赤城山南麓（あるいは広く東毛地区）というある程度の広がりがある地域で確認することができます。1型式を設定するに足り得ると判断できると思います。しかし、かつて古く位置づけたⅠ期の資料が四半世紀以上立っても増えていません。新資料にはⅡ期以降の資料が多いということは事実です。やはり、弥生時代後期のある時期、赤城山南麓を含む東毛地域には無人の荒野が広がっていたのでしょうか。赤城山南麓地域に軸足を置く者としてそんなことは無いと思うのですが。

また、赤井戸式土器は弥生時代の土器ではなく古墳時代前期の土器ではないかという疑問があります。

赤井戸式土器は在地の弥生土器の1型式です。それが、時期が新しくなるにつれて、赤井戸式土器の特徴の一つである縄文という文様を失っていきます。その過程は土器の変遷で追うことができます。この文様を失った土器を弥生土器と呼ぶか、土師器と呼ぶか、私は、在地の弥生土器の延長として古墳時代の土器があるという立場から古墳時代の弥生土器も有りと思っています。ただし、この在地の弥生式土器の伝統を受け継いだ土器群も、墳丘を伴

う高塚が造営される時期には、斉一的な土師器へと置き換わって行くことはまちがいありません。ここで、むしろ、この時期の土器群を、かつて、周東隆一さんが提唱した「熊の穴式土器」として赤城山南麓から東毛地域のこの時期の土器を代表させるという考え方もあるのではないかと思い始めています。